

氣は落る物也、兎角熱してのぼるゆへ也、内をすかすやうに飼てよし、諸鳥ともに内を冷す様にすべし、

羽虫わく病ひ有、鳥の煩ひ也、又籠の内きたなき時はわく物也、大羽むしは虱の細きやうなる有、又丸きあり、何も鳥の身のわき毛の間をくゞり歩行、早き物なり、中々取つくす事もなりがたし、其時は何鳥にても水を度々あびせてよし、又ウズをせんじさまして、其水にて洗ふべし、羽虫には妙なり、

又羽虫とも付ず、糠をまきたる様に、こまか成虫、巢に付たる鶏にわく物也、是はあしき物にて、其巢を新しく取かへても又出る、前はたま／＼、巢鶏の内に、此むしわきて捨る事有しが、明和七寅とし、同八卯年、巢鳥残る所なく、此むし多わきて、玉子もひやし捨る事多し、又としに寄てかくのごとくの事有、心得の爲是を忘るす、人の身へうつりても、こと／＼くさして悪虫也、鹽湯又は火をもやして、焼ころすがよし、此明和の七八兩年は、大日照ゆへ、かくのごとく虫も春より出し歟、并薬之事、くんろくをせんじ、さまして洗ふもよし、右何にても洗わんと思ふ時、其鳥を手に持、毛を逆に撫て、毛の間々へ先たばこの煙を吹込べし、虫浮て毛へ散亂するもの也、其所を早く右の水にて洗ふべし、羽むしには妙なり、

又右のごとくなるこまかなるむし、座鋪中へちる時は、外の鳥へもうつり、人へもうつる物なり、疊のうへに落たるには、火のしに火をつよくして、其散たるあたりへかけるがよし、みな火にあたりて死す也、

〔飼鳥必用〕^上總體諸鳥に用る妙薬

一 伏龍肝

但しかまどの古き燒土也、是第一内をすかす薬也、

一人參

元氣をいだす

一 ウニコヲル

熱をさます

一 堅紅

血の熱をさます

一 とふがらし

餌のもだへたるすかして内をめぐらす